

重点取組分野	令和 4 年度		総括	重点取組分野	令和 5 年度		総括	重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①基礎基本の定着を図るために、明確な学習課題の設定、学習の過程が分かりやすい学びを通して、「分かる」授業づくりを目指す。②校内重点研究である「生活科・総合的な学習の時間(横浜の時間)」を中心に、主体的に学ぶようとする子どもたちを育てる。③ICT(タブレット等)の積極的な活用を通して、学力向上に応じた指導の手立てを講じる。④積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢を育て、対話的な学びが展開できるようにする。	・学習の意欲が高まるよう学年でしっかりと授業計画を立てた。その結果、新しいことに興味、関心をもつ積極的な学びをする児童の姿が多く見られた。苦手なものを、努力を要することに最後まで粘り強く取り組むことが課題である。 ・コロナ禍の中でもできる他者とのかわり合いを模索し、人や学びの場とのつながりを大切にしたが主体的に学習を進めることができた。 ・ICTのよさを生かし、積極的に学習で活用した。児童の活動の幅が広がった。	B	授業改善	①基礎基本の定着を図るために、明確な学習課題の設定、学習の過程が分かりやすい学びを通して、「分かる」授業づくりを目指す。②「生活科・総合的な学習の時間(横浜の時間)」を中心に、主体的に学ぶようとする子どもたちを育てる。③ICT(タブレット等)の積極的な活用を通して、学力向上に応じた指導の手立てを講じる。④積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢を育て、対話的な学びが展開できるようにする。	・児童が主体的に学ぶよう、興味を引き出す手法を学年で考え、「分かる」授業の計画を立てた。苦手なものをやろうとすることに粘り強く取り組む力が弱いことが課題ではあるが児童も努力している。引き続き授業改善に取り組んでいく。 ・他者とのかわり合い、人や学びの場とのつながりを大切に、「本物」と触れ合う体験を重視しながら主体的に学習を進めることができた。 ・ICTのよさを生かし、積極的に学習で取り入れた。様々な場面で活用し、児童の情報活用能力育成に力を注いだ。	B	授業改善	c1		
人権教育	①日常的に一人ひとりのよさを認めるとともに、学習や活動、行事など様々な機会を効果的に活用することで、自尊感情を高められるようにする。②人権週間等(たてわり活動やベア学年での交流、幼児小や小中連携交流)で、児童の実態に合った取組を行い、互いを認め合える学校風土を醸成していくようにする。	・中学校との子ども会議、旭区人権子ども会議に代表児童が参加し、日々のあいさつや言葉遣いについて振り返った。「やさしい言葉辞典」を作るなど各学年でも取り組む人権意識を高めた。 ・たてわり活動やベア学年交流、学年集会などを増やし、互いに認め合ったり協力し合ったりすることができるようになった。自分らしさを好きになり自信がもてるようにすることが課題である。	B	人権教育	①日常的に一人ひとりのよさを認めるとともに、学習や活動、行事など様々な機会を効果的に活用することで、自尊感情を高められるようにする。②人権週間等(たてわり活動やベア学年での交流、幼児小や小中連携交流)で、児童の実態に合った取組を行い、互いを認め合える学校風土を醸成していくようにする。	・中学校との子ども会議、旭区人権子ども会議に代表児童が参加し、友達との関わりや言葉遣いについて振り返った。「やさしい言葉辞典」を各学年でも積極的に取り入れて活用し、人権意識を高めた。 ・たてわり活動やベア学年交流、学年集会などを積極的に取り入れ、互いに認め合ったり協力し合ったりすることができるようになった。互いを認め合い、自分らしさを好きになり自信がもてるようにすることは今後も課題である。	B	人権教育	c2		
健康教育	①運動をする楽しさや心地よさを体育を通して味わわせるとともに、委員会活動が主催する「Sチャレ」等でさらに体力の向上を図る。②学校保健委員会をきっかけに、自分の健康や生活習慣を見つめ直す機会を設け、健やかな成長を支援していくようにする。③栄養職員と家庭科専科が担任と連携し、日々の食育を推進していくようにする。	・コロナ禍の中でも実施できるように各学年で「Sチャレ」に取り組めるようにした。体育の学習、休み時間などで運動が好きなよう工夫をしたり、体力向上に意識が向くよう学校保健委員会をきっかけとした活動に取り組ませたりした。依然として運動不足やけがの不安があるので持続可能な運動の方法を模索中である。	B	健康教育	①運動をする楽しさや心地よさを体育を通して味わわせるとともに、委員会活動が主催する「Sチャレ」等でさらに体力の向上を図る。②学校保健委員会をきっかけに、自分の健康や生活習慣を見つめ直す機会を設け、健やかな成長を支援していくようにする。③栄養職員と家庭科専科が担任と連携し、日々の食育を推進していくようにする。	・休み時間の校庭使用制限をなくしたので外で活発に活動できるようになった。各学年で「長縄」に取り組めるようになった。体育の学習、休み時間などで運動が好きなよう工夫をしたり、体力向上に意識が向くよう学校保健委員会をきっかけとした活動に取り組ませたりした。今後も持続可能な運動の方法を提案し、体力向上につなげていく。	B	健康教育	c3		
自分づくり教育	①社会科や総合的な学習の時間を核としながら、地域で体験的に学ぶ機会を設けることで、様々な関わりの中で自己有用感を育むようにする。②「自分づくりパスポート」を活用しながら、これまでの自分の学びの足跡を振り返るとともに、「なりたい自分」を実現していく態度を養う。	・社会科や生活科、総合的な学習の時間の中でお互いの学びを分かち合ったり応援し合ったりしながら切磋琢磨し、自己を確立していく力を養うことができるようになった。自分を知り、深められるようにした。 ・「自分づくりパスポート」を活用し、自己と対話を重ね、自分自身を知り、深められるようにした。	B	自分づくり教育	①生活科や総合的な学習の時間を核としながら、地域で体験的に学ぶ機会を設けることで、様々な関わりの中で自己有用感を育むようにする。②「自分づくりパスポート」を活用しながら、これまでの自分の学びの足跡を振り返るとともに、「なりたい自分」を実現していく態度を養う。	主に生活科・総合的な学習の時間の中で人や地域、自然との関わりが活発になり、自分について考える力や違いを理解する力、課題に対応する力を育み自己をマネジメントする力につなげていく取組を再開することができ、児童の生き生きとした姿が多く見られた。自己と対話を重ね、自分自身を知り、深められるようにするために「自分づくりパスポート」の活用方法をさらに工夫する必要がある。	B	自分づくり教育	c4		
いじめへの対応	①「いじめ防止基本方針」に則り、教職員の意識を高めて未然防止に取り組む。②いじめアンケート、Y-Pアセスメントシートを効果的に活用し、実態把握に努める。③「いじめは許されない」ということを常に掲げ、いじめが起こりにくい学校風土と構造について子どもたちが自ら考える機会を設定する(不動丸子ども会議)④情報を共有し、保護者・児童が誰にでも相談しやすい体制づくりを整える。	・「いじめは許されないこと」を理解できるように教職員が連携し、いじめが起こりにくい風土づくり、体制づくりに取り組んだ。児童自らが考えて行動できるように努めている。いじめは許されない」ということを常に掲げ、いじめが起こりにくい学校風土と構造について子どもたちが自ら考える機会を設定する(不動丸子ども会議)④情報を共有し、保護者・児童が誰にでも相談しやすい体制づくりを整える。	B	いじめへの対応	①「いじめ防止基本方針」に則り、教職員の意識を高めて未然防止に取り組む。②いじめアンケート、Y-Pアセスメントシートを効果的に活用し、実態把握に努める。③「いじめは許されない」ということを常に掲げ、いじめが起こりにくい学校風土と構造について子どもたちが自ら考える機会を設定する(不動丸子ども会議)④情報を共有し、保護者・児童が誰にでも相談しやすい体制づくりを整える。	・児童支援専任を頼り「いじめは許されないこと」を理解できるように教職員が連携し、いじめが起こりにくい風土づくり、体制づくりに取り組んだ。友達との関わりが活発になり、児童自らが考えて行動しなければならぬ場面が増えたが、その都度考え時間を設け、後々に自分たちで解決できるように努めている。引き続き、児童の話をじっくり聞いたり、アンケートをもとに話し合ったりして状況を見守り、一人ひとりが安心して学校にしていけるようにしたい。	B	いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	①4,5,6年を中心とした「教科担任制」の推進を行い、創造的・効率的な学年運営を図る。②校内OJTを進め、個々が自分の役割において質の向上と業務の改善を目指した工夫を推進する。③学年、低・中・高ブロック、級外との連携など、チーム意識をもって対応や業務に取り組む。④校内外の研修、メンターチーム等、主体的、協働的な取組の充実を図る。	・教科担任制(通年・小単元)を活用し、児童の様子や変化を多角的に理解し、共有することができた。また、より深い教材研究や指導法研究が可能になった。 ・教職員各自が自分のキャリアステージに合わせた目標設定を行い、ステップアップを目指して研修を行った。メンター研では自主的に学び合い、学校経営にも積極的に参画した。	B	人材育成・組織運営(働き方)	①4,5,6年を中心とした「教科担任制」の推進を行い、創造的・効率的な学年運営を図る。②校内OJTを進め、個々が自分の役割において質の向上と業務の改善を目指した工夫を推進する。③学年、低・中・高ブロック、級外との連携など、チーム意識をもって対応や業務に取り組む。④メンターアドバイザーを配置し、メンターチームの活性化を図る。	・教科担任制(通年・小単元)を活用し、児童の様子や変化を多角的に理解し、共有することができた。また、多種多様な研修を積み重ねることにより、教職員としてのスキルアップも図れた。 ・教職員各自が自分のキャリアステージに合わせた目標設定を行い、ステップアップを目指して研修を行った。メンター研では自主的に学び合い、学校経営にも積極的に参画した。	B	人材育成・組織運営(働き方)	c6		
地域学校協働活動	①令和4年度より立ち上げる鶴ヶ峯中・不動丸小合同学校運営協議会を軸として、「9年間育てる子ども像」を共有して学校運営に取り組む。②地域の自治会等と連携し、子どもたちの地域参画体制を整えていく。③キッズクラブと連携を強化し、情報交換を行いながら児童の健全な成長を支援していく。	・合同学校運営協議会の発足に伴い、小中の連携をより強固なものになってきている。学校と保護者、地域が9年間を見通した健全な児童、生徒の育成を進められる礎を築いている。 ・キッズクラブと連携を強化し、情報交換を行いながら児童の健全な成長を支援していく。	B	地域学校協働活動	①2年目となる鶴ヶ峯中・不動丸小合同学校運営協議会を軸として、「9年間育てる子ども像」を共有して学校運営に取り組む。②地域の自治会等と連携し、子どもたちの地域参画体制を整えていく。③キッズクラブと連携を強化し、情報交換を行いながら児童の健全な成長を支援していく。	・合同学校運営協議会の発足に伴い、小中の連携をより強固なものになってきている。学校と保護者、地域が9年間を見通した健全な児童、生徒の育成を進められる礎を築いている。 ・キッズクラブと情報共有しながら、児童の様子を丁寧に見取り、支援を行うことができた。	B	地域学校協働活動	c7		
特別支援教育	①一人ひとりが自信をもって学習や活動ができるように「個に応じた支援」体制を強化する。②様々な課題を抱える子どもたちの居場所を確保するためにチームで支援にあたり、ステップアップチームを軸とした特別支援教育の体制の確立を進める。③きめ細かく個を捉え、保護者理解を進めながら、カウンセラーやSSW、専門機関とのつながりを推進していく。	・家庭、地域及び医療や福祉等の関係機関と連携を図り、長期的な視点での児童への教育的支援を行うために、個別的教育支援計画を作成、活用しに努めた。また各教科、領域等の指導に当たって、個々の児童の実態を的確に把握した。教職員の人数が足りないという現状ではあるが、一人ひとりが安心して居られる場所となるようにできる限り体制を整えていく。	A	特別支援教育	①個別の支援計画を保護者と共有し、児童の実態に即した個別最適な学びづくりを進める。②様々な課題を抱える子どもたちの居場所を確保するためにチームで支援にあたり、ステップアップチームを軸とした特別支援教育の体制の確立を進める。③学校カウンセラーやSSW、専門機関とのつながりをさらに大切に推進していく。	・家庭、地域及び医療や福祉等の関係機関と連携を図り、長期的な視点での児童への教育的支援を行うために、個別的教育支援計画を作成、活用しに努めた。また各教科、領域等の指導に当たって、個々の児童の実態を的確に把握した。そもそも教職員の人数が足りないという現状ではあるが、一人ひとりが安心して居られる場所となるように、引き続き体制を整えていく必要がある。	B	特別支援教育	c8		
情報教育	①ICTの活用を推進し、子どもの発達段階に応じたスキルの習得を目指す。②目的に応じた情報選択や情報活用ができるようになるとともに、情報モラルを育む。③学校図書館を活用し、各学年の年間学習計画に照らし合わせながら、適切な本の貸し出しや学校司書と連携した授業支援ができるようにする。	・昨年度よりICTの活用が進み、学習活動の幅が広がった。授業内容を児童自身が理解できるまで繰り返し学習したり、画像による視覚的な資料を大量の情報から価値ある情報に導き出しやすくなった。今後は自分の発想と組合せて新しいものを生み出す力に注いでいくことが課題。 ・「読書記録ファイル」を一人ひとりに配付し、読書の習慣化、内容の把握につながるようにした。	B	情報教育	①目的に合わせたICTの活用ができるように、子どもたちのスキル獲得と情報選択ができるようにする。②利便性と危険性を学びながら、発達段階に合わせた情報モラル教育を進める。③学校図書館を活用し、各学年の年間学習計画に照らし合わせながら、適切な本の貸し出しや学校司書と連携した授業支援ができるようにする。	・視覚や聴覚からの情報取扱いにより、学習の理解度と情報活用能力の向上につながるよう学習計画や教材づくりを工夫した。児童が情報についての知識、活用の仕方などを幅広く学ぶことができた。また情報モラルの学習にも力を入れて取り組んだ。 ・「読書記録ファイル」を一人ひとりに配付し、取り組まれている。その結果、読書の習慣化、内容の把握につながるようになった。	A	情報教育	c9		
道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、他者とのかわり合いを通して自己を見つめ直し、よりよく生きようとする心情と態度を育てる。②道徳教育推進校として学校全体で年間を通した取組を意図し、公開授業研究会や旭区一斉授業研究会等を通して発信していく。③外部講師を招いて研修を行い、教職員全体の授業力向上、スキルアップを目指す。	・今年度は「豊かな心の育成推進校」旭区一斉授業研究会(道徳授業校)として公開授業を行い、講師を招き、参観者とともに学びを深めた。児童の日常に欠かすことのできない「他者」とのかわり合いが生まれる「問い」(学習課題)を取り上げ、多面的、多角的に物事を考え、自分の言葉で振り返ることができ授業づくりを目指した。	A	道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、他者とのかわり合いを通して自己を見つめ直し、よりよく生きようとする心情と態度を育てる。②令和4年度に道徳教育推進校として取り組んだ成果を検証し、さらに指導の在り方等ブラッシュアップを進める。③授業だけでなく、日常生活そのものを道徳の学びの場と捉え、全職員で意識して取り組むようにする。	・道徳の時間の学習を通して、自分のよさに気付かせ、自分の日常生活や学びを見つめる時間を大事にした。日々の生活の中で問題意識をもって主体的に考え、他者との関わりによることを生かせるよう指導、支援してきた。今後もこうした取組を積み重ね、よりよい人間関係を育んでいく。	B	道徳教育	c10		
ブロック内評価後の気付き	・今年度はコロナ禍の影響で中断していた中学校での授業研修会を行った。発達段階に応じた学習指導や評価について意見交換を行い、互いの学校での取組や工夫を知ることにより、自校での指導改善への一助となった。また児童生徒の様子や成長を共有し、9年間育てるべき力やその具体的な方針を再確認した。 ・小中担当者会は児童生徒理解にかかわる有意義な時間となった。小学校6年生が中1ギャップを感じないよう、小中学校の担任間での引き継ぎも進んでいる。			・今年度も中学校での授業研修会を行った。発達段階に応じた学習指導や評価について意見交換を行い、互いの学校での取組や工夫を知ることにより、自校での指導改善への一助となった。また児童生徒の様子や成長を共有し、9年間育てるべき力やその具体的な方針を再確認した。 ・小中担当者会は児童生徒理解にかかわる有意義な時間となった。小学校6年生が中1ギャップを感じないよう、小中学校の担任間での引き継ぎも進んでいる。				ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価	・教育活動がコロナ禍以前のものに異なるもの、新たに取り組み始めたもの等で精選する時期に来ており、真に必要な学びや活動を見極めることが大切だと感じる。子どもたちの元気な声は地域にも必要不可欠であり、学校教育同様、地域での活動にも参加できる体制をあらためて築き直していきたい。 ・3年にも及ぶコロナ禍において、児童の心の発達に不安を感じる。心のケアを十分にしながら、教育活動を進めていく必要がある。			・小中の連携が継続的に進んでいることで、9年間を見据えた児童生徒の育成が進んできている。教育活動の幅を広げ、地域に展開していくとする学び舎活動をさらに構築していく必要がある。 ・児童生徒の学校生活は安定しているように感じる。校内環境がよく、ハード面の整備も大切であると感じる。				学校関係者評価			
中期取組目標振り返り	・豊かな心の育成は道徳等を柱に、主体的な学びや地域との関わりを大切にしながら、生活科・総合的な学習の時間を核としながら、教職員が目指すべき児童の姿を共有して教育活動を推進してきた。児童理解についても、保護者と連絡を密にしながら支援の方向性を探ることで、多様な支援を展開している。 ・ICT活用を始め、新しい学習形態にも柔軟に対応できている一方、これまで培ってきた学びの手法についても見直すことで、新旧の融合を図った本校の児童に適した学びの在り方を今後も探っていく必要性を感じる。			・GIGAスクール構想も黎明期を過ぎ、児童・教職員も一定の活用ができるようになってきたことは大きな成果である。一方で、必要感のある活用方法を探る時期にもなり、振り返りを行いながら、これからの教育活動の在り方を検討していく必要性も感じる。 ・創立50周年に関する大きな行事を行う過程で、児童の愛校心を育むことができた。区切りを終えて、新しい教育活動を展開していく準備を進めていけるように成果と課題をさらに精査していきたい。				中期取組目標振り返り			